

宇治茶の世界文化遺産登録推進プラットフォーム（第1回戦略検討会議）

結果概要

日時：平成25年6月24日（火）17:30～19:30
場所：宇治茶会館 2階 第2会議室

1 趣旨

宇治茶の世界遺産登録は、有形資産でいこうという話になっている。茶畑の景観があげられているが、宇治茶の本質は文化的資源なのか？農産物なのか？あえて意見を集約させないで棚卸的に今日は知恵を出してみようというのが今回の趣旨である。

2 概要

- 世界遺産登録を推進するためには地元の気運が盛り上がらないといけない。登録推進を支持する人・応援する人がいないといけない。そういうことは検討委員会だけではできない。行政や地元、プラットフォームでいろんな関係者が集まって推進していくこととなる。
- プラットフォームで推進していくに当たり、どういう戦略で世界遺産登録を進めていこうとしているのか。検討委員会がどんな戦略を検討しているかを我々プラットフォームが理解しておかないと、議論が拡散してしまう。
- 宇治茶の世界遺産登録に対して、地域では、商売や産業振興としか見ていない方もいらっしゃるかもしれない。茶農家や茶商、生業の中で関わってらっしゃる方もそれは仕事やと割り切られていられるかもしれない。
- だからこそ、宇治茶の世界的な価値をいかに山城の人達と共有して、世界の人と共有するのか。それに向かって知恵を絞りたい。
- 茶畑の景観をすばらしいと思われるが、生業があつての景観と思う。私たちに100%近い後継者があるわけではない。生業をしていると景観は少し後回しになる。やはり農業は儲からないといけない。儲からない農業をしていたらやる人はいなくなり、景観の保全もできない。
- 宇治での茶の生産量は全国では数パーセント程度。わずかな生産量だが、お茶の好きな方は茶所と言えば宇治茶と言われる。ただ、関東に行くと静岡。逆に西に向けば向くほど宇治になる。宇治茶で世界遺産登録を目指すことはありがたいが、もっと行政から「茶」を発信してほしい。
- 宇治茶には歴史的な価値がある。永谷宗円は今の日本茶のルーツ。抹茶、玉露も宇治が発祥。いいお茶に歴史的な人物、場所もあるし景観もある。
- 宇治茶で忘れてはならないのは、京都独特の宇治品種。行政関係はじめ、それぞれ開発され選抜されてきたのが今日の宇治茶の礎になっている。
- 宇治茶の話了他産地ですと、お抹茶でしょ、玉露でしょと思っていた以上に印象付いている。このことは大きな魅力と考える。

- 宇治茶にいろんな茶種があるのは、非常に大きな魅力だと思う。TPOに合わせて、いろいろなおもてなしもできるし、自分自身の生活、ひいては人生を豊かにするツールになるのではないかなと思う。寝る前にはほうじ茶、ゆったりしようかと玉露やてん茶とか、ちょっとシャキっとしたいなら煎茶にしようか、そういう幅がある。
- 玉露は高いお茶やし、いいお茶やという説明では売れない。歴史があるでは飲まない。飲んでみて美味しいなという、それが感動になれば売れるのではないかな。
- 米づくりと茶づくりの考え方は異なり、米づくりでは集落などで共同して一定の収量を確保することが大切であるが、茶づくりは高い品質を求めて農家同士が競争、研鑽する世界であり、個々の農家独自の作り方、考え方がある。それが、宇治茶の作り方の根源であろうと思う。抹茶、かぶせ茶、玉露、てん茶は、みんな宇治茶から出てる。その生産だけでなく二次加工の技術にも高い物があり、そのような技術開発に関わった人たちに焦点を当てて発信していくことも大切であると思う。
- 和東の茶畑を府景観資産登録に取り組んだNPOの方達は、この登録で生産農家を守るという強い思いを持っておられた。農家の方が生業を、自分の地域を守る。地域の中でそういう意識が高まるということが、一番に必要なことかなと思う。
- 世界遺産の登録というと、一般の人もそうだなと思えるシンプルな柱がないといけない。「宇治茶を」というフレーズだけでは宇治のエリアを盛り上げよう思ってるのかなと思われる。日本緑茶発祥の宇治茶とか。日本全体にアピールできるものでありたい。
- お茶の面白さは、葉っぱを混ぜたら変わるし、温度変えても変わる。自分で操れる面白さ、そこが特徴。だけど一般の人には知られてない。日本茶の面白さを、言ってみれば今までの伝統の中に沈み込んでいたものを形を変えて新たに広く流すといった、そういう視野の元にこの世界遺産の運動が展開すればいいと思う。たとえば、近くに茶ムリエがいて、茶ムリエ喫茶があり、多様な茶種が並んでいて、そこに行けば、味や香りのオーダーに対応してくれる。お茶の面白さがものすごくわかりやすく伝わると思う。
- 淹れ方が面倒でなくて、淹れ方を変えたらこんなに味が違うっていうのが感動になったらお茶が売れると思う。
- 有形資産ということで、茶園の風景だったり茶問屋の町並をあげられているが、少し遠いなって思う。文化とか歴史があって、その先に有形資産的なものがあるのではないかなと思う。お茶をもっと身近に楽しむという環境があって、そこから茶畑や茶問屋の町並み、景色なんだろうと思う。そういう意味では、宇治茶というものの自体を広げていくということが大事。
- また、茶畑となると、案内しにくい場所が多い。バスを降りたら遠い。世界遺産となれば、たくさんの人を迎えていかないといけない。アクセスを全体で考えていかないといけない。
- 宇治茶のブランディング化をどうするか。差別化を図るということだが、他の生産地をけなすブランディングというのは、このプラットフォームで追求していく方向性ではない

と思う。宇治茶は日本茶のオリジナルな部分が多くあるので、他の生産地から文句はつかないだろうし、日本茶を毀損する話ではない。日本茶を毀損して宇治茶だけでというのはあり得ない話。

- ペットボトルのお茶を見たときに、そのものをイメージしないで宇治茶をイメージしてもらえそうな仕掛けをする。それが宇治茶の価値につながる。
- コーヒーもペットボトルや缶が普及しているが、豆や粉でレギュラーコーヒーを淹れる方も多い。これは、飲み方の文化であり、ペットボトルや缶より香りがあり、おいしいことが知られているから。お茶は、ペットボトルでもいいと思われている方が多いのではない。急須が家にはない人も多い。急須で淹れると色々な楽しみがあるということが知られていない。日本茶を急須で淹れる文化を広めないといけない。こうやって飲んだら美味しいということ、まずそこから知ってもらわないと、飲む人の需要が拡大しない。生産量も増やすことができない。
- お茶は、お茶として飲む以外に、抹茶プリンになったり、かき氷になったりするが、抹茶シロップのかき氷は生産量が多いからといって「静岡金時」と呼ばれることはなく、どこまでいっても「宇治金時」と呼ばれる。これは、宇治茶がブランドになっており、歴史と文化があるから。そういう意味で、まずは淹れ方を含めた文化と歴史をどれだけ広めていくことができるかが、大切である。
- 観光の切り口からいうと、「今しかない」、「ここしかない」という特別感が魅力となる。宇治あるいは山城地域に行かないと体験できないことや、お茶の本場に行かないと体験できないような特別プランが人を惹きつける。
- 他産地の方が言う宇治茶の強みの一つは、歴史、文化には勝てないと言われる。もう一つは、商人がいていいなと言われる。茶商が多く、茶が売れないことはないのではと言われる。生産の技術と加工技術という文化があって、その文化が受け継ぎ支えてきた歴史に価値がある気がする。
- 人に注目してもらわないとお茶の応援団はできない。皆さんの意見を聞いていると見せ方が大事となるが、やはり「比較」をすると人が感動を覚えるとこれまでの経験で思っている。宇治茶って文化がある、歴史がある、という声をあげて、新しい日本茶の発祥の宇治茶ということで進めていければと思う。

3 まとめ

景観は、そこに見えているものを担っている人があってはじめて守られていく。文化も担い手がつくることではじめて守られる。お茶も飲まれないと作られない。では、生産農家だけ頑張ればいいということではなくて、生産、消費、プロモーションが全部あってはじめてひとつのつながりが作られる。難しさとともに、私たちが取り組まないといけない問題の全体像は、こういったものである。

今日の議事録を整理して、次回はそれぞれの課題についてどうするかという戦略について検討を行う。